

Н. А. Тшагоров編『経済学教程, 第2巻, 社会主義』¹⁾ 第2版, (1970年)について

小 野 一 郎

1. 本書はモスクワ大学経済学部集団的著作で、ソ連邦の経済系学生用に編纂されたものであるが、1963年に出版された初版に今回かなり大幅な増補改訂を加えて刊行を見た。

本書の初版が刊行された60年代前半は、それまでアカデミー版『経済学教科書』しかなかったソ連邦の経済学界に一種の教科書ブームが起こった時期で、10種類をこえる経済学教科書がつぎつぎに発行されている。やがて経済改革へと発展してゆく50年代後半以来の新しい路線の展開は、社会主義経済学の一連の問題に関する広範な論争に導いたし、社会主義経済学の論理体系の構築の試みに刺激を与えずにはいなかったのである。

本書の初版はこのようなソ連邦における社会主義経済理論の新しい発展段階の産物であるが、社会主義的生産関係の端緒的範疇の位置に計画性をおく本書の論理構造が社会主義的所有を出発点とする通説とことなるなど、いちじるしい方法論上の特色をもっているところから活潑な論議の的となるに至った²⁾。この特色は第2版にそのまま受けつがれている。初版以来の論争の決着はまだついていないし、異論も少なくないが、本書がアカデミー版以後一步も二歩も前進したソ連邦の経済学の到達水準をよく示していることは確かである。

2. 本書はつぎの4部からなる。

- 第1部 社会主義的生産様式の形成
- 第2部 社会主義のもとにおける生産関係の体系
- 第3部 社会主義世界体制諸国間の経済関係
- 第4部 二つの世界体制の経済競争

1) 《Курс политической экономии, т. II, социализм》, под ред. Н. А. Цаголова, изд. 2-ое, дополненное, Изд. «Экономика», Москва, 1970.

2) 初版の内容と問題点および当時の論争については、拙稿「ツァゴロフ編『政治経済学教程, 第2巻, 社会主義』とソ連邦における社会主義政治経済学の体系をめぐる論争」(『立命館経済学』第14巻第2号所収)を参照されたい。なお、たとえば1969年刊行のルミャンツェフ他編のものや高級党学校のものなど最近発行された教科書についてみても、端緒的範疇に関しては通説をとっている。

本書の主要部分をなすのはいうまでもなく第2部である。第2部は全50章中37章をしめ500頁にあまるが、その構成は大要つぎのとおりである。

第1篇 共産主義的生産様式の基礎

- 第1分篇 社会主義的生産の一般的形態および本質
- 第2分篇 共産主義的労働の形成
- 第3分篇 社会主義的生産の発展の合法則性
- 第4分篇 社会的規模における社会主義的拡大再生産の合法則性

第2篇 社会主義のもとにおける商品・貨幣的關係

- 第3篇 必要生産物の諸形態
- 第4篇 社会のための生産物と経済計算制的企業
 - 第1分篇 社会主義的企業の生産物および生産フォンドの価値の運動形態
 - 第2分篇 社会のための生産物の諸形態と経済計算制的効率

第5篇 社会主義的生産過程の管理

- 第1分篇 社会主義的生産過程の管理の諸類型および諸形態
- 第2分篇 社会主義的拡大再生産の組織形態
- 第3分篇 経済的刺戟

第6篇 社会主義から共産主義へ

以上の構成からもうかがわれるように、本書の第1の特徴は、社会主義的生産様式を二重の歴史的形態規定性において把握していることである。第2の特徴は、社会主義的生産関係の体系の論理展開において、単純から複雑へ、抽象から具体へという『資本論』の上向法の適用を追求していることである。とくに第2版では、ツァゴロフが書いているようにこの点での体系化がさらに進んだ³⁾。初版では第3篇以下におかれていた労働日や社会主義的再生産などの問題を組入れるなどして第1篇の充実化をはかっていること、初版では第4部にまとめていた社会主義から共産主義への移行の諸問題を第2部の各篇に組入れ、その総括的把握を最終篇でおこなっている

3) Н. А. Цаголов. „Проблемы политической экономии социализма“, «Вестник МГУ, серия VII, Экономика», No 1, 1971.

こと, あらたに経済管理に関する独立の篇を起こして, 初版では再生産の問題と混在していた計画化, 国家予算, 信用の問題もこの篇に組入れたこと, などがそれである。第3の特徴は, 経済改革や最近の理論の新しい展開の方法論的・原理論的整理を試みていることである。これはもちろん初版には見られなかった特徴であるが, 初版以来の第1, 第2の特徴に無理なく同化させられており, このことが本書の理論的一貫性を強めている。理論の実践からの立ちおくれの克服というソ連邦の学界のさし迫った関心から出発しつつ, 他方で安易な経験主義を拒否して厳密な論理をもった経済学的範疇の体系の創出をめざすという初版で宣言された問題意識が, このようなまとまりをもたらしたのであろうか。

本書で論じられている問題ははなはだ広い範囲にわたっており, 教示に富んだ問題提起も多いが, ここでは本書の以上の三つの特徴に限定して, それをめぐる問題点を簡単に探ってみることにしたい。

3. 本書は社会主義の性格規定を「社会主義とは不完全な共産主義である」(104頁)という命題から出発させている。この命題の第1の意味は, 「社会主義経済は資本主義から社会主義への過渡期社会の経済と根本的にことなる」(606頁)とする点にある。過渡期が社会主義, 資本主義, 小商品生産という三つのウクライドの存在を特徴とするのにたいして, 社会主義には単一の型の生産関係の存在が特徴的であることが, その根拠となっている。中国流の社会主義=過渡期説は明確に否定されているわけである。

上記の命題の第2の意味は, 「社会主義は新しい共産主義的生産様式の第1段階にすぎない」(91頁)とする点, すなわち社会主義を完全な共産主義から区別する点にある。そのさい本書は, 「社会主義と共産主義の間の本質的差違にもかかわらず社会主義は独自の生産様式ではない」し, 「社会主義があたかも独自の自立した生産様式であるかのような結論を下すのは正しくない」とする立場をとる(608頁)。最近発行された東ドイツの経済学教科書に見られるような社会主義を相対的に独自の構成体とみなす見解はとらないわけである。もっともソ連邦でも最近クロンロードが東独説をしりぞけながらも, 「社会主義的生産様式を人類発展の共産主義時代の第1の自立した特殊・歴史的生産様式, 第1の初期段階とし

て規定する」ことを提唱するなど, 異論がないわけではない⁴⁾。ただこの見解は生産様式の概念規定にかかわって提起されたもので, 社会主義の歴史的位相づけの内容については本書と根本的な違いはないようにも思える。

いずれにしても, 弁証法的発展の視点から, 『ゴータ綱領批判』にいう「共産主義それ自身の基礎」と「旧社会の母斑」とからなる二重の歴史的形態規定性をもった, 未成熟な共産主義として社会主義をとらえるのが本書の基本的立場である。本書はこのようなオーソドックスな立場から出発して, 社会主義の性格とその矛盾, およびこの矛盾の克服過程=共産主義への移行過程について, 具体的で多面的なすぐれた分析をおこなっている。しかしこの点で同意しがたいものが含まれていることも指摘しておかねばならない。

たとえば本書は, 「社会主義は精神労働と肉体労働の間の対立を完全に消滅させる」として, 両者の間には「生産力の発展水準と生産関係の性格に条件づけられた社会経済的差違が存続する」だけであると述べている(174頁——傍点評者)。社会主義的労働がはらんでこの矛盾を『ゴータ綱領批判』のように対立としてとらえるのではなく, 差違に解消してしまうことには大きな疑問が残る。確かに本書は社会主義段階における共産主義の未成熟性を旧社会の母斑との関連でとらえているけれども, ソ連邦の学界にかなり一般的な見解を反映して, この母斑のまさに旧社会的性格を, それにたいして主導性をもつ共産主義それ自身の基礎というふるいにかけてしまうようなところがある。社会主義「経済そのものには資本主義的と社会主義的という二つの傾向の闘争はない」(607頁)とする断定は, このような傾向の集中的表現であり, 理論的に厳密なものとはいえない。

もっとも, 完全な共産主義にかなり接近した高度に発達した社会主義を想定してのことなら, こうした見解もおそらく首肯されねばなるまい。しかし, もともと社会主義を不完全な共産主義として規定するのに, こうした段階を想定するのではおよそ意味がない。また社会主義の全発展過程をおしなべてそのような段階でおきかえたのでは, 現実の社会主義社会に見られる時としてきわめて鋭い矛盾と激しい震動は正確に把握できない。社会主義の二重の規定性なり共産主義の未成熟性なりを単に量的過程においてでなく質的過程においてとらえるという視点が, 本書のばあいもっと強烈であってよいのではなからうか。本書で社会主義の発展段階区分が展開されていないことはこのことと無関係ではあるまい。この問題についてはクロンロードが前出の論文で社会主義の発展

4) Я. А. Кронрод. „К вопросу о социалистическом способе производства и стадиях его развития“, «Известия АН СССР, серия экономическая», No 3, 1971, стр. 97-98.

の3段階区分を提唱し、現在のソ連邦は第3の最高段階でなく第2段階にあるという興味ある見解を示している⁵⁾。もっとも、これにたいしてコズロフがさっそく論難を加えているが⁶⁾。いずれにしても、今後の社会主義の現実の発展のなかから、本書の共著者たちが社会主義的生産様式の性格規定と歴史的な位置づけの問題のいっそう深められた解明を提示してくれることを期待したい。

4. 本書は二重の歴史的形態規定性において社会主義的生産関係の体系を把握するのに、具体的にはこれを(1)一般共産主義的關係、(2)共産主義の低次の段階としての社会主義に特有の關係、(3)社会主義以前から存続する關係に区分したうえで、前二者を一括して共産主義的生産様式の基礎とし、(3)は事実上商品・貨幣的關係のこととしている。一般的に共産主義それ自身の基礎と旧社会の母斑とを区別するとともに、「社会主義的生産關係はその本質において商品的でない」とする立場から、「商品形態を捨象した社会主義的生産關係」ないしは「全社会的規模における直接に社会化された生産」の本質的構造と、商品・貨幣的關係とを明確に区別するという方法をとっているわけである(256頁)。このような把握は社会主義の二重の規定性、すなわち共産主義それ自身の基礎と旧社会の母斑との前者の主導性のもとにおける矛盾的統一の解明において、重層的論理展開に導く。すなわち、社会主義の二重的性格を、まず第2部第1篇の共産主義的生産様式の基礎の考察において社会主義の本質的生産關係について明らかにしたのち、第2篇の商品・貨幣的關係の考察において社会主義經濟の編成様式ないしは機能・組織形態の視角から解明し、これらの基礎に立って第3篇以下では具体的現象形態の次元でさらに分析を進めている。このような本書の論理体系に『資本論』の上向法のすぐれた応用を見出すことができる。

ただ本書が一般共産主義的關係と特殊社会主義的關係とを一括しておしなべて共産主義的生産様式の基礎とよぶことには、問題があるように思われる。本書のこの用語法は、それが「社会主義と資本主義との原則的対立を表現し、社会主義の完全な共産主義への転化の主要方向を規定する」(104頁)ものとみなしていることによるのであろう。しかし、そのような規定的役割をはたすのは旧社会の母斑を内蔵する特殊社会主義的關係全体というよりは、それにふくまれる共産主義それ自身の基礎であ

ろう。このように社会主義の二重的性格の本書における把握と関連しているだけにこの用語法には疑問を感じるが、このことは第2部の論理展開の基本的構造にたいする疑問を意味するものではない。

本書の論理体系のいま一つのいちじるしい特色は、「社会的生産過程の計画的組織化は全人民的所有が社会的生産全体の規模において経済的要因として機能する端緒的形態の役割を演ずる」(106頁)という、本書独特の見解にもとづいて、社会主義的生産關係の体系の端緒的範疇の位置に計画性をすすめる点にある。すなわち、歴史的には社会的生産の計画的組織化こそが生産の形式的ではない実際の社会主義的社会化、つまり生産手段の国有化の経済的実現の出発点をなしており、また論理的にも「計画性は社会主義的(共産主義的)生産のすべての基本的経済的過程に特有な全般的な形態である」(107頁)とされるのである。経済学にとって問題なのは社会主義的所有の法的ないしは形式的事実ではなく、その経済的内容、すなわち「現実の労働過程において生産手段が労働力と結合される」(101頁)關係の解明なのであるから、所有を論理展開の出発点とする通説は、この点に関して全巻をつうじて解明されるべきものを端緒におくという決定的ともいえる難点をもっており、本書は自己の論理体系を実際に通説に対置することによってこの難点を鋭くつくこととなった。

初版刊行前後の端緒的範疇をめぐる論争において登場した見解には、本書の計画性説と通説の所有説のほかに、集団性説や社会的生産物説があり、さらに最近では欲望説が提起されるなど議論百出の感があるが、前二者については注2)の拙稿でくわしく紹介したことでもあり、ここでは第2版で計画性説の論理展開をより体系化したように思われるつぎの点を指摘するにとどめたい。それは計画性範疇の内容を、(1)社会的生産全体の計画的組織化、(2)社会的生産の機能と発展の計画性に整理している点である。つまり、計画性は何よりも直接に社会的な生産の生産關係の本質によって規定されるこの生産全体の組織形態としてとらえられたうえで、そのような生産の編成様式として、さらには発展形態として考察される。したがって、それは生産編成様式の無政府性ないしは自然発生性に対置されるというより、商品生産的關係に対置されるべき範疇としてとらえられており、このようなものとして直接に社会的な生産の本質的關係、その編成様式ないしは機能メカニズム、さらに発展傾向へと展開をとげるべき経済的細胞の位置におかれていると考えられる。計画性範疇のこうした把握および位置づけは、前

5) Там же, стр. 96.

6) Г. Козлов. „Об этапах развития коммунистического способа производства“, «Вопросы экономики», No 7, 1971, стр. 128.

述の第1篇と第2篇の対象および相互の位置関係と密接に関連しているように思う。

5. 本書の第2版が経済管理に関する独立の篇をあらたに起こしたのは、いうまでもなく経済改革の進行や社会主義経済理論の最近の展開に触発されてのことである。この篇の第3分篇のテーマを経済的刺激としたこと、そのなかに経済的刺激の形態としての価格、あるいは企業の経済計算制的刺激ファンドを扱った章をおいたことなどは象徴的である。そのさい本書は社会主義的生産関係の二重の規定性において、社会主義から共産主義への発展の歴史的展望において経済の現実を評価するという基本的視点をつらぬくのであって、何よりも直接に社会的な生産としての社会主義的生産の本質的關係に規定されるものとして、その編成様式ないしは機能メカニズムを把握するのが特徴的である。したがって、全社会的生産の統一的・集中的計画化および管理の原則の主導性のもとへの商品・貨幣的關係の組込みを強く主張することとなる。こうした立場は、市場社会主義論の批判、価値法則や価格の扱い方、あるいはそこでの効用価値説や最適価格説の批判、さらに個人的物質的関心の位置づけ、収益性や利潤の把握、その他に一貫している。また集中的計画化・管理原則の主導性の主張が管理への労働者の大衆的参加の積極的確認を含んでいることは注目し得る。この問題は、過渡期の初期段階における労働者統制、精神労働と肉体労働の差違の克服、賃金やノルマの決定の組織などの問題に関連してとりあげられている。

経済改革は社会主義的生産の編成様式に関連してその合理的・効率的組織化ないしは最適計画化の問題を、現実と理論の前面に押出した。しかし数理経済学派のフェドレンコが指摘するように、「経済的範疇の分析への没システム的・非構成的接近がもつあまりにも記述的な性格をおび⁷⁾」ていたソ連邦の経済学は、そのままではこれらの問題にたいして無力であった。この点での経済学

のいわば体質改善はソ連邦の学界全体の緊急の課題であるが、本書もまた上述のような本質の論理による機能の論理の規定という基本的立場から、この課題への取組みの意欲を示しているのが印象的である。

もともと合理的経済行動の原理を商品生産ないしは資本主義の専有物視することはできない。逆に本書の初版においては、社会主義的生産様式の本質的特徴の一つをそれが最大限節約と最高労働生産性の体制であることに求め、これに一つの章をあてている。第2版の第2部第1篇ではこの章に加えて社会主義的生産の効率の問題に関する章を起こしている。また計画性の考察における稀少性の問題、企業の経済計算制の解明におけるいわゆる最小支出最大効果の問題、計画化方法の考察における最適計画化や効率の問題、投資効率や価格の分析における代替性の問題など、第2部の随所に経済の合理的・効率的機能という視角が顔を出すようになっている。これに関連して初版で指摘されていた経済分析と計画化への数学応用の必要性を再確認し、国民所得の計算の説明に部門間バランス(産業連関分析)の数学的方法を実際に使っていることなど興味深いものがある。こうした本書の新らしい傾向のなかに、社会主義経済の編成様式ないしは機能メカニズムを、質的把握を基礎としつつ量的な一般的構造の論理において確定するというソ連邦の学界の最近の問題意識がうかがわれる。この点での本書の新らしい試みはまだ初期的なものにすぎないが、このような姿勢の原則的妥当性は疑いを入れないように思う。

以上若干の問題に限定して私見を述べたが、本書は全体としてのまとまりもよく、多面的な問題意識と体系的な論理展開において注目すべき力作である。私事にわたって恐縮であるが、評者のモスクワ大学時代の恩師の多数を含む著者集団にたいして本書第2部刊行への祝意を表したい。

(立命館大学経済学部)

7) Н. П. Федоренко. «О разработке системы оптимального функционирования экономики», Изд. «Наука», 1968, стр. 7.